

令和三年度 卒業式 式辞

本日、本校を巣立ちゆく、七十四回生の皆さん、卒業おめでとうございます。三年間よく頑張りましたね。

今年度も新型コロナウイルスに振り回された年となりました。しかし、本校では皆さんが現実を受け止め、不平、不満を言わず、道を踏み外すことなく、淡々と学校生活を送る姿に感動し、私たち教職員も大いに励まされました。

そんな皆さんの卒業にあたって1つ、話をします。

皆さん、文楽(ぶんらく)を知っていますか？わかりやすく言うと、数人で人形を操りながら歌やセリフを言う人形浄瑠璃(じやうるり)のことで、江戸時代の文化で近松門左衛門などの話で習ったことはあるかも知れませんが、古臭くて、わかりにくいと、恐らく見たことがある人はいないと思います。しかし日本の伝統芸能として、引き継ごうとする人もいます。その一人、豊竹藤太夫(とよたけとうふ)さんは昔を振り返ってこう述べています。「師匠の人間国宝、竹本住太夫(たけもとすむたふ)はそれは厳しい人だった。気持ちが入っていない、声の出し方が悪い、動きがわからへん。基本ができていない。10分のシーンに2時間かかって稽古(けいこ)したこともある。弟子入りして22年間。一度も褒められたことはありません。」

長所をほめて伸ばす。自尊感情を高める指導が社会では主流です。それは決して間違っているとは思いませんが、ややもすれば「褒められて当然」「何で褒めてくれへんの？」という意識の高まりと、叱られたことへの反発やショックを感じる人が多いように思います。叱ることに込められた愛情や、叱る人の気持ちを汲み取ることができる人が何人いるでしょうか？豊竹藤太夫は最後にこう述べています。「叱られて泣いたことは二度もない。でももし師匠に褒められることがあったら、その時はきつと泣いてしまうと思う。」元来褒められるとは、こういうことかも知れません。

私は令和元年の皆さんの入学と共に3年間校長として一緒に過ごせたことを嬉しく思っています。そして入学式の式辞では次のように言わせてもらいました。中学校で3つの力を身につけよう。その力とは「学力」「コミュニケーション力」「耐力」です。そして最後の耐力は体(からだ)の体力と耐える力と書く耐力であるという話でした。どうですか？3年間で少しは身につきましたか？これからはひとつとしたら褒められることより、叱られることが増えるかも知れません。でも褒められて「よしがんばろう！」と思う力と同じくらい、叱られても「よしがんばろう！」と思える力も育んでいってください。これが皆さんに贈る私からのメッセージです。

最後になりますが、保護者の皆様、お子様もこんなに大きく、立派に育ちました。ご卒業、おめでとうございます。そして今日まで、本校教育にご理解、ご協力をいただき、ありがとうございます。私たち教職員も至らぬ点もあったかと思いますが、お子様のために精一杯尽くしてきたつもりです。どうか今後とも、地域の皆様と共に、ご支援のほど、よろしくお願い申し上げます。

それでは、名残は尽きませんが、卒業生の皆さんが、この社会を強く生き抜いてくれることを祈念し、式辞といたします。

令和四年三月十六日

明石市立二見中学校 校長 矢野毅吉